

人生に必要な知恵は幼稚園の砂場で学べなかったが、研究者になるきっかけは大学で得ました

今はこうして大学教員などしていますが、いきなり大学の教員を目指した訳ではなく、選択をしなければならぬ岐路でそのつど意思決定をした結果に過ぎません。

学部2年次の英語の授業で夏休みのレポートを課された時でした。ネタに困って外国人の先生にヒントをもらいに行ったところ、「じゃあ君はStock Marketでもやってみたら」とテーマをもらったことで関心を持つようになりました。そのレポートが出発点となり、3年次のゼミ（経営分析）を選択することとなり、さらに研究室でアノマリーと呼ばれる株式市場での特異な現象を記した書籍に出会ったことが、この分野の研究を本格的にしてみようと思ったきっかけです。子供の頃から調べたことをまとめて文章にするのが好きだったこともあり、民間・大学問わず研究職に就くのも良いかな？と思っていたことも理由の1つでした。

株式に代表される金融・証券取引に対しては、そのリスクからギャンブル的なイメージを抱く人は多く、ある意味それは正しいのですが、金融・証券市場は余剰資金を効率的に配分するシステムであり、経済成長、企業成長のエンジンです。資金循環が血液ならば市場は心臓の役割を果たしています。個人の利己的な欲求（投資して儲けたい！）が経済成長のエンジンとなりうるとは、良くできた仕掛けだと思いませんか？

金融・証券市場は心臓みたいなものですから、時々、心拍数が跳ね上がったたり、止まりそうになったりや様々なことが起こります。金融・証券市場に対する法律、行政の介入はある意味、外科的治療（手術）にあたります。私自身の研究テーマは証券価格の形成です。普段は自身の研究を「お金儲けの研究だよ」と自虐的（？）に説明をしているのですが、正しい価格形成のための諸条件を明らかにする研究が健全な市場づくりにつながるのであれば、これは内科的治療というよりも、普段から健康（な市場）であるための研究、予防医学のようなものかなと考えています。



- 企業財務論Ⅰ・Ⅱ
- デリバティブ論
- 証券論

阿部 圭司
(あべ けいじ)

新潟生まれ、特に考えもせず地元国立大に進学。バブル景気で日本中が浮かれている中、何かの間違いで東京の大学院に進む。卒業後、運よく本学でお世話になることに。新潟→東京→群馬と高崎～上越線沿線が生息域。専門は証券市場分析、企業財務、コンピュータ・リテラシ。